

第3講：72 「救かる身やもの」

はじめに

教祖の逸話は、『逸話篇』として纏められており、いわゆる「エクリチュール」（書き言葉）として読ませていただくことができる。ところが元々は、教祖がおぢばがえりされた信者たちに説かれたお話、すなわち「パロール」（話し言葉）であった。信者たちは教祖から聞いた教えによって、それまでの生きかたを大きく転換された。逸話は親の代から子の代へ、さらに孫の代へと、世代を越えてパロールとして伝承されてきた。

私たちは教祖の逸話をとおして、原典のお言葉に込められた意味合いをより深く理解させていただくことができる。ここでは、72「救かる身やもの」の逸話を手がかりとして、今ここに生きていることの真の意味をめぐって、私たちの信仰の理解を深めていくことにした。

お言葉「救かる身やもの」に込められた意味

村上幸三郎という先人（天保12年〔1841〕～明治33年〔1900〕）は、泉東分教会（大阪府堺市）の初代会長であった。明治14年、幸三郎氏が講元となって真誠組が組織され、明治23年の高安分教会設置の際、部属の講社となった。明治25年、高安分教会部属の泉東支教会が設置されると、幸三郎氏が初代会長になられた。

幸三郎氏は、明治13年頃から、坐骨神経痛のために手足の自由を失い、激しい痛みで苦しんだ。そこで、竜田の近くの神南村（現・生駒郡斑鳩町神南）にお灸の名医を訪ねたが、不在であった。そこで、平素から聞いていた「庄屋敷の生神様」を頼って、教祖のもとに帰られた。すると教祖は「救かるで、救かるで。救かる身やもの。」と、お声をおかけ下され、いろいろ珍しいお話をお聞かせ下されたという。幸三郎氏は、身も心も洗われたような、清々しい気持になって帰途についたという。

さて、教祖が「救かるで、救かるで。救かる身やもの。」と言われたお言葉は、この世界が親神のご守護の世界であるという天理教のコスモロジー（人間観・世界観）を含意している。つまり、「神のからだ」と教えられるこの世界において、私たちが親神のご守護によって生かされて生きているという生の根源的事実性を理解することができる。「おふでさき」には、次のように記されている。

たんへとなに事にてもこのよふわ
 神のからだやしやんしてみよ 三・40・135
 このたびハ神がをもていでゝるから
 よろづの事をみなをしへるで 三・136
 めへへのみのうちよりのかりものを
 しらずにいてハなにもわからん 三・137
 しやんせよやまいとゆうてさらになし
 神のみちをせいけんなるぞや 三・138

教祖の「珍しいお話」（教理）を聞かせていただいて、幸三郎氏は「身も心も洗われたような、清々しい気持になって帰途についた。」自分自身の病いが「神のみちをせいけん（道教え・意見）」であることを悟り、澄んだ心になられた。帰り際に教祖から頂いたお水を、家に帰ってから、「なむてんりわうのみこと

なむてんりわうのみこと」と唱えて、痛む腰につけると、三日目には痛みは夢のようになくなり、ご守護をいただいたという。

「御恩返しの方法」—互い立て合いたすけ合い—

幸三郎氏は、おぢばがえりのたびに、身上は回復へ向かい、明治14年正月、本復祝いをおこなっている。おぢばへ帰った幸三郎氏は、教祖に「御恩返しの方法」をお伺いした。教祖は「金や物でないで。救けてもらい嬉しいと思うなら、その喜びで、救けてほしいと願う人を救けに行く事が、一番の御恩返しやから、しっかりおたすけするように。」と仰せられた。幸三郎氏は教祖のお言葉通り、たすけ一条の道を歩むことを心に誓った。

天理教のコスモロジーによれば、私たちは二重の生のつながりを生きていると教えられる。まず、親神と私たち人間は「をや」と子の呼応関係にあり、さらに、世界中の人間は皆、親神を「をや」と仰ぐ一れつ兄弟姉妹の関係にある。したがって、世界中の人間が心を入れ替えて、人々をたすける心になり、互いにたすけ合うとき、親神もその心をお受け取りくだり、どのようなたすけもしてくださる。

私たちの二重の生のつながりについて、「おふでさき」には、次のように分かりやすく記されている。

このさきハせかいぢううハ一れつに
 よろづたがいにたすけするなら 十二・93
 月日にもその心をばうけとりて
 どんなたすけもするとをもゑよ 十二・94
 また「みかぐらうた」には、次のように記されている。
 なにかよろづのたすけあい
 むねのうちよりしあんせよ 四下り目 7

「おかきさげ」にも、「人を救ける心は真の誠一つの理で、救ける理が救かるという。」と論されている。この逸話において、村上幸三郎という先人は、親神のご守護によって救けていただいたことの喜びを周りの人々に伝えていった。教祖のお言葉通りに、たすけを求める人々に教えを説き、おたすけに奔走されたのである。

おわりに

この逸話から、私たちはお道の信仰のあり方を確認することができるだろう。まず、私たちが日々、親神のご守護によって生かされているという生の根源的事実性。このことは一見、当たり前のように思えるが、決して当たり前のことではない。この逸話をとおして、生きることをしっかりと理解させていただくことが肝心であろう。さらに、「おさしづ」に「皆んな勇ましてこそ、真の陽気という。」（明治30年12月11日）と論されるように、互い立て合いたすけ合って生きる—この生き方こそが、私たち一人ひとりにとって本来的な生き方であることをしっかりと理解させていただきたい。

このように教えに照らして、生きることをとらえなおすとき、お道の信仰において「心通り」とか「心次第」ということがしばしば強調される。そのことについても、お道の信仰のあり方を理解するうえで重要なポイントであることに言及した。